

◆ 自然回帰 ◆

今号の高田さんの「花想鳥感」では、水無瀬の『コミミズク』が取り上げられています。近年の淀川において珍鳥の本種が出現したのは、ゴルフ場閉鎖に伴うエサとなるネズミ類の増加に原因があるようですが、そこに至る自然環境の変化を考えてみます。

まず、この地の経緯を考えると、ゴルフ場稼働時は芝生の生育のためにおそらく有機肥料が撒かれ、他の草本やミミズの発生を抑えるために薬品等も散布されていたものと思われます。しかし、閉鎖後は薬品の影響が無くなり、残存する有機肥料により栄養を蓄えた土壌に草本が生えと同時にミミズが大発生し、それを求め昆虫類やネズミが集まり、さらにその小動物をエサとする猛禽類や肉食の哺乳類が集まってきたのでしょう。冬に渡ってきた『コミミズク』は、たまたまこの地で羽を休めた際に、草地に思わぬご馳走が溢れていることを知り、越冬場所として留まったのではないのでしょうか。

『コミミズク』の他の生き物としては、淀川ではお馴染みの『チョウゲンボウ』、冬を代表する猛禽類の『ノスリ』に加え、『ホンドリツネ』や『ニホンイタチ』も見ることができます。これらの生き物は、いわゆる生態ピラミッドでいうところの頂点、高次消費者にあたり、これだけ多くの肉食の猛禽類、哺乳類を支える生態系の裾野はかなり広く、豊かであることの証拠に他なりません。ただ、イタチについては、大陸からの移入種『チョウセンイタチ』も見られるので、喜んでばかりは居られません。

このゴルフ場閉鎖・放置後の河川環境に対して、「自然回帰」という言葉は適当とは言えないかも知れませんが、この河川敷では、昔のように多様な生物が集まり、貴重な生態系が再び築かれたのです。



●コミミズク



●ノスリ



●ニホンイタチ



●チョウゲンボウ

環境省 環境カウンセラー
NPO法人 nature works

池田 哲哉

水辺の博物誌



目立つ羽角は耳にあらず

トラフズク *Asio otus*

冬季の淀川、河川内の小高い樹林で、一際目をひくミミズクを見かけることが稀にあります。オレンジ色の目(虹彩)、茶色と黒の複雑な模様、そしてミミズクのシンボルとも言える目立つ羽角をもつトラフズク。淀川で見られる本種は渡り鳥で、本州の寒冷部から冬季にのみ移動して来るようです。日中は樹木や林で休んでいますが、偶然に散策しているとき目が合ってしまうことも。よく、ミミズクの羽角を耳だと思っている人がいますが、これはただの飾り羽で、本当の耳は目の横で、羽毛で覆われています。(画/西山美月)



来た・見た・聞いた 淀川雑記帳



去年の10~12月、福島管内を幾度も歩いたが、野犬に会わない日はなかった。人を恐れず、人には慣れず。もとはペットであろう。人間の勝手な都合で捨てられ、淀川で懸命に生きている。この子たちに罪はないが、河川公園を利用する人にとっては迷惑な存在。ジョギングが趣味

の友達は毛馬地区で野犬に追いかかれたという。私も見たことのある黒い犬。首輪もリードも付けられていない。飼い主らしきおっちゃんが放し飼いをしているようだ。

ペットの遺棄は動物虐待行為。日本では50万円以下の罰金が科せられる。愛玩動物を飼うなら、最期まで責任をもって面倒を見なければならない。(編集長・石山郁慧)

多種多様、淡水魚たちの生態と生活史 淀川水系魚類名鑑

希少野生動植物保存推進員
横山 達也

ゲンゴロウブナ

Carassius cuvieri

今回紹介するゲンゴロウブナはコイ目コイ科で、フナの仲間ですが、その改良品種として知られている「ヘラブナ」の方が皆さんに馴染みがあるかもしれません。この「ヘラブナ」は、ゲンゴロウブナの特に体高が高く、大型になる品種を改良したもので、他にも大阪のため池で改良された「カワチブナ」が知られています。もともと琵琶湖・淀川水系固有の魚ですが、改良された品種の「ヘラブナ」や「カワチブナ」が日本全



大きな目で
周りの様子をうかがう



後に増水して冠水した陸上植物などに産卵します。食性はおもに植物性を中心としたプランクトンなどを食べています。釣りの対象で「釣りはフナに始まり、フナで終わる」と呼ばれるほど、非常に人気が高い種です。琵琶湖流域では、洗いや煮つけ、みそ汁などにして利用されています。環境省のレッドリストで、「絶滅危惧ⅠB類」にされるほど、生息地の減少や外来生物の侵入により激減しています。

under the water

the waterside

花想鳥感

四季折々、
水辺の生物多様性

高槻市立自然博物館 主任学芸員
高田 みちよ

水無瀬のコミミズク

一昨年から淀川の水無瀬ゴルフ場跡地でたくさんのコミミズクが見られ、話題となっていることはご存じでしょうか。コミミズクは大阪では冬鳥で、広い草地や農耕地に飛来します。淀川や猪名川の広い河川敷には毎年越冬に来ていたのですが、ここ数年は確認がなく、非常に珍しい存在になっていました。なのに、突然一昨年に10羽以上のコミミズクが淀川河川敷に飛来し、一大センセーションを巻き起こしました。とくに「白ちゃん」と呼ばれていた白っぽい個体はカメラを全く気にせず、撮影用に立てられた棒にこれみよがしに止まり、「撮って」といわんばかりにいるようなポーズをとってくれ、完全にアイドルになっていました。驚くべきは、観察に来ている人の多さ！ 夕方に行けば確実に見られ、写真が撮れるとあってブログやSNS、口コミで噂が広がり、1000人以上のカメラマン、バードウォッチャーが淀川河川敷につめかける事態に...。今年もコミミズクは飛来しているとのこと。ゴルフ場が閉鎖になったことでハタネズミが急増し、それを狙ってコミミズクが集まっているようです。人は口コミでコミミズク情報を知って集まっていますが、SNSも口コミも使っていないコミミズクがどうやってハタネズミ情報をゲットしているのか。とても不思議です。



◆写真提供 (上)
池田哲哉



the sky & land

水辺の

虫眼鏡

川に棲む水生生物の魅力的な生態

人を自然に近づける川いい会 捕獲番長 川島 大助

ミズムシ

年初めのテーマが「水虫」って!? もちろん、あの足裏の水虫ではありません。淀川には昆虫綱カメムシ目のミズムシ、軟甲綱ワラジムシ目のミズムシが生息していますが、今回は後者をご紹介します。見た目のとおり、分類学的にはダンゴムシに近い種です。体長は大きいもので10mm程度。足は5対以上あり、体色は灰～茶褐色です。河川や水路の流れの緩やかな淵、湖沼等の川底をゆっくり匍匐し、主に落ち葉等がたまったところに生息しています。近縁種のダンゴムシは、陸上で落ち葉などを捕食しますが、本種も水中で落ち葉等を捕食します。

また、水質の指標生物でもあり、きたない水(水質階級Ⅲ)の指標種になっています。棲んでいるところが、水が淀んだ落ち葉や浮遊物が堆積するような場所であることから、残念ながら「きたない水」の指標になっています。しかし、清冽な河川の上流域でも、淵の落ち葉溜まり等に生息しています。水中に堆積した落ち葉等の有機物を分解してくれる、川の清掃屋として、河川や水路、湖沼等の色んなところで活躍してくれているのです。



ダンゴムシを伸ばしたような
姿をしている



ミズムシたちの大掃除により、水中でも気持ちよく新年を迎えることができていることでしょう。水中の落ち葉をタモ網等で拾い上げると、ゆっくり匍匐するミズムシを見つけることができます。毎日、川を清掃してくれるミズムシをぜひ観察してみてください！

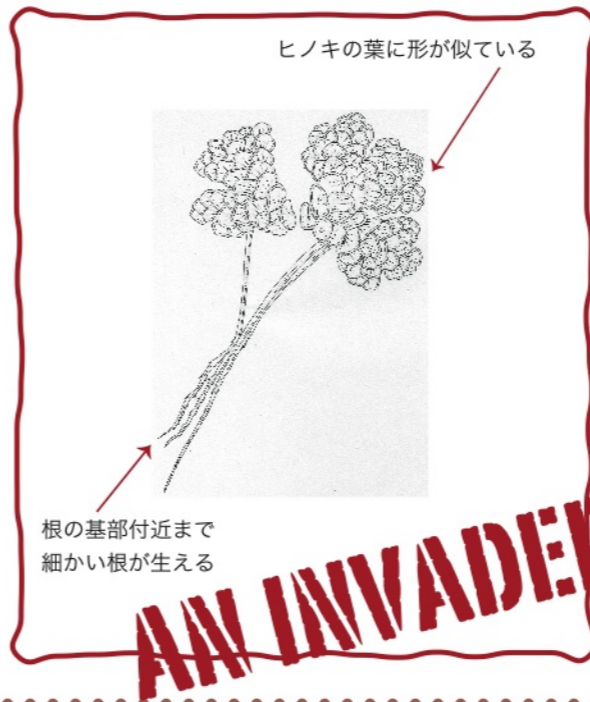
the worst 100

侵略的外来生物

淀川ワースト100

アカウキクサ科 アゾラ
Azolla

淀川管内河川レンジャー 石山 郁慧



AN INVADER

原産地は南北アメリカ、ヨーロッパ、アジア、オセアニア、アフリカ。直径5～30mmの小型の浮遊植物。かつてはアイガモ農法の際に、アイガモの餌や水田の肥料として利用されていた。それが水鳥の脚などに付着して分布拡大したそうだ。茎から芽を出して盛んに増え、水面をおおい尽くすことにより、在来種との競合、水中の生態系に大きな影響を与えるため、特定外来生物として2次指定された。淀川で問題になっているのは中南米原産のアゾラ・クリスタータを農業用に改良した雑種のアゾラ。栄養が足りていると緑色、不足すると赤色になる。真夏や真冬は真っ赤になり、水面に絨毯を敷いたように広がっている。



◆写真提供 (上)
川島大助



●ワンドに広がる本種には脅威を感じさせられる。

